表紙	コヨタ	三寸六分
	テタ	五寸一分
本文枠	コヨタ	二寸七分
	テタ	四寸

百花評林叙

花ノ花トス可キハ。常ノ花ニ非ズ。多情ヲ把テ閬苑ニ喚ビ。芳心斯ニ訴ヘ。一味三弄シテ。花ノ花トス可キハ。常ノ花ニ非ルコトヲ知ル。既ニ之ヲ知ルトキハ。則チ百花春苑ヲ閉ヅルト雖。自ラ其ノ情ニ通ズ。而シテ後探華ノ三昧盡キタリ。百花評林甫メテ就ル。因テ聊カ歳月ヲ記シテ。以テ之ガ叙ヲ爲ル。

丁卯春正月之吉

探花亭主人題

百花評林

此篇擧平康里之諸花。以評其風度意氣。古人以美女比花者多。故以百花命題云。

○太夫

松位者爲花木之長。高砂尾上之若緑契千世万代之春。貫四時。全盛之松色還稻葉山之昔於今。不變不易之風姿。威而不武。位而不厳。諸分意氣不凡。下交謀擧動不野鄙。式部情深而小町張强。實花中之聖者也。傳云万花榮春一紅同。不同處在三冬時。其斯之謂歟。

年さむき松の心もあらはれて花さく色を見する雪かな

○椀久先生評して云。此君を物にたとへていはゞ。富士の山を筑山とし。近江の水海を泉水とし。松嶋象潟の風景を取よせて。庭をかざり。更料の月を不斷に詠むる風情ならん

○山崎先生が云。太夫なればとて。あまり結構過たる見立は。かへつていやみ有もの也。たゞかるくはづみたる所に。風雅の味ひあれば。それがしが存ずるは。晉羽瀧を液汁にして。吉野の櫻を一輪うかべたる吸物の風情なるべし

○探花子が云。わん久は其姿の。大びらなる所を評し。山ざきは其風情の。ゑならぬ所を見付たるなるべし

○天職

梅位者風流第一花。自冬範逐離波津之春。濃染色深而包千袖。色千心染之傳レ之。以生田之盛。則一枝花翩飛千百媚。業平暗尋香。賴政開愈而待之。姿與情不全劣太夫。宿鶯囀全盛之辰。春雪添此花之清艶也。古人爲百花之兄。誠花中之賢者也。傳云梅無雪則不精。神雪與梅併作十分春。斯之謂歟。

うちつけに身にぞしみぬる梅花にほひは袖に色は心に

○藤伊先生評して云。此君を物にたとへていふ時は。みよし野の花盛に。龍田山の紅葉をときまぜたるを。衣裳として。姨捨の月に打きせ。道中させて見たる心地なるべきが

○探花子が云。此君は雪の夜のあけぼのを。膾にして。花の春を。盛分にしたる風情ならん

○鹿繼

鹿繼者如櫻花乎。綻二芳野之春。如月彌生之盛。八重九重之色深。交常盤松。友三春梅。俊成攀白雲探レ姿。定家凌レ霞尋色。諸分意地不レ減天職。實花中之達者也。傳云花色

惱レ人。暗ー香奪レ心。其ー斯之謂歟。

みよしのに入てぞ見つる山櫻うき世の外の花の色をも

○山樂評して云。今は別に鹿戀といふ君はなし。今の小天神。見世天神などいふ君達は。むかしの鹿戀の部ならん。近き比までも大天神につゞきて。小天神と各段の位ありしが。いつの比よりか。大天神といふ位の君さへ見へわたらず。鹿戀といふ古き名斗殘れり。又近年。見世太夫といふ君ありしが。是もいつしか名のみとゞまりて。今はなしと聞侍る。扨此君をたとへて見れば。惣金の屏風に。極彩色にて。八長を繪がきし風情ならん。古びても。直打はあるものとぞんじます

○探花子が云。たとへば山里の。柴の庵の奇れいに住なしたる所にて。琴の爪音けたかくほのめくに。心まよひて。其主をゆかしく思ひて。立さりがたき心地の君といはんか

○月

月ー君者似ニ淺茅生ー菜。淺紫色有ニ艸緣ー由。赤ー人誤ニ此ノ色ー。結ニ一ー夜夢於春ー日ー野。但恨ニ色ー香乏ー耳。

かすが野にすみれつみにとこし我ぞ野をなつかしみ一夜ねにけり

○春夢評して云。此君はうき藻をかきわけて。池水にうつる月を見るがごとし

○探花子が云。龍腦の過たる薫物のごとし。少ししつこき所は。其御位なれば是非なし

○影

影ノ君者如ニ澤ー邊杜ー若。濃紫色奪レ朱。八ー橋之花ー盛。業ー平駐レ馬。小ー町寄ニ此ノ花ー而乞レ琴。實花ー中之媚者也。

八はしのむかしの跡のかきつばた同じ心にこひわたるかな

○哥夕評して云。此君は花見に行たる時。思ひもよらぬ人の來りて。酒を飲つくされ。ぜひなく日の内に。花を見すてゝかへる心地の君也

○探花子が云。此君は安南の伽羅ともいはんか。すがりまへに。少し殘りおゝき所あり。是も其御位なればせんかたもなし

○汐

汐ノ君者似ニ井ー手樣ー棠。一ー面金ー色粧ニ玉ー川之春。八ー重花ー葩含ニ幽ー香。蔚ー陰露ー蕚ニ下ー行水。則蛙愛ニ色ー香。而吟ニ三ー月之盛。世ー人比ニ之光ー次印ー通。誠花ー中ノ清ー艶者也。

もろこしの人に見せばや燒金のこがねの色にさける山ふき

○露情評して云。此君も今の小天神の格式にて。鹿戀の部なれども。むかしより月は一ッ。影は二ッに。みッ汐とい

百花評林

ひならはし。各段の位をさだめ來るゆへ。本文にも。月影汐の三品をあらはして。それ〳〵の評判をするとはいへども。前にもいふごとく。此君もむかしの鹿戀の位なるべし。扨此君はしだり柳に海棠の花をさかせ。梅が香をふくませたる風情ならん

○探花子が云。無疵のさんごじゆの。心ほど寶のひろき心地かとぞんずる

○分

分ノ君者垣ノ根槿ノ花也。花ノ脆無レ匂。纔半ノ日之榮不レ待レ暮。師ノ兼深怜ニ此ノ花之下ノ紐。固花ノ中ノ之短者也。

とくるかと見る程もなし朝がほの夕かけまたぬ花の下ひも

○吟之評して云。此君は庭にふるあは雪の。むらぎへしたる風情なるべし

○探花子が云。此君をしやくしかけとやらん。けちとやらんいふは。あまり成悪口也。此君も花の中なれば。あしさまにいふべきやうはなし。伽羅の燒がらともいわんか。いにしへはいかなる人やらん。小町がゆかりやらしれぬはさて

○娵娟

引ノ船者似ニ村ノ濃藤ノ花ニ。常纏ニ常盤松ニ。紫緣由色契ニ千ノ壽之春ニ。因松與レ藤甚ノ睦。古ノ人曾詠ニ此ノ意ニ焉。花ノ中ノ之順者也。

むらさきのゆかりの色にふちの花かゝれる松もむつましきかな

○其風評して云。此君はおし出してのつとめといふにあらず。太夫にはぜひ付もの也。たとへば月に陰あり。花に香のあるがごとし。祝言の夜の嶋臺ともいふべき君ならん

○探花子が云。うつくしき下女に。櫻の折枝をかたげさせ。旦那の供につれた

る風情也。外の目に。どふやらこのもしく見ゆる心地なり

○鴨母

遣ノ手者似ニ殘ノ菊ニ。雖レ有ニ餘波色ニ。而三ノ冬霜枯。姿荒蔵ノ寒雪風色ノ埋。又不レ免ニ鬼ノ薊之譏ノ也。

色かはる秋もすへの〻霜枯にうつろひ殘るしら菊の花

○千風評して云。此人は色のさめたる。むらさき縮緬のごとし。むかしの色ぞ忍ばるゝ

○探花子が云。年久しくなる掘茶のごとし。色も香もどこへやら

○香兒

禿ノ者其ノ品頗ノ多矣。有ニ松若ノ綠ノ。有ニ梅ノ櫻ノ者ノ。開ニ上ノ頭ノ而後定ニ其ノ位ノ也。今嘗言レ之則類ニ倭黠ノ麥ノ歟。二ノ葉藏ニ金ノ錢之色ノ。寖及ニ生ノ長ノ而八ノ入錦誰

染レ之。俟三一五之界一云。

まきしには同したねぞと見しか共ちくさに咲る大和なでしこ

○三鳥評して云。たとへば巣だちのうぐひすの。梅の花をおもしろがり。枝にたはむれあそぶ風情ならん。可愛らしきものなり

○探花子が云。香敷にのせて出す伽羅のごとし。焼ざる内がいのち〳〵むかしより玉子にたとへ。花のつぼみに見立るは古ければ。今あらためて評する事右のごとし

○素人 一名呂州

白人者在二南一嶋及北一濱之新一地。其花桐壺牡丹也。不二唯花之富貴一一段風一流姿。今二太一夫之妖一態。一一等之艶一色。驕二天職之妖一冶。益清彌一美。四一方之雜一花無二敵レ之者一。古人賞レ之爲二花一王一誠不レ虛矣。傳云一一枝白牡一丹。費二四一五日一刻。人不二敢知一之。其一斯之謂歟。

さきしより散りはつるまで見しほどに花のもとにて廿日へにけり

○南風評して云。此君を物にたとへて見る時は。三井富山の土用干を見る心地ならん。至極見事なる中に。ぼつとりめきてじみなる桜様もまじわり。端手なる中に。くすみたる色もあり。品めきたる所に。地道なる氣色もあり。郭の君達と。地女をつき交にしたる也

○探花子が云。上〻の白米のごとし。上つかたも召あげられ。地下人も食す。上下おしなべて賞翫するものゆへ。白米にたとへたり。なんといづれもそうでは有まいか

○厨娘

中一居者如二八一染紅葉一。平一日之紅一妝。秋一深染一盡。龍一田一姫風一容。一一段酒一分。無レ花不レ見二開落一。但三一秋之榮一也耳。

わかす見る心にわくる色はなし枝の紅葉のこきもうすきも

○秋思評して云。日ぐれに管絃かたむけて。足ばやに通る女中のごとし。色あひさだかならねども。心にくき風情といわんか

○探花子が云。虎屋の焼まんぢうのごとし。見かけからどふやらこのもしく。喰て見れば。根が地女なれば。各別のうまみありと。つまみ喰したる人の評判なり

○歌兒

藝一子者百一花之生一茅也。不レ競レ色。不レ爭レ香。故曰二無一色一若一夫有レ色者。不レ在二此限一。

いろ〳〵に薄くもこくもおき渡る花とつゆとの中ぞゆかしき

○春夕評して云。雨あがりの虹のごとし。色は見へながら。其色が手にとられず。

藝子になづむ人の心を。くみ分て見れば。大かたかくもあらんかとぞんじます

○探花子が云。金五を引がごとし。十二三までが花なり。十五を過れば。ばれ氣が見へるものと。ある人の見たて置れしなり

○坂　町

坂町花者似芙蓉。清則清。雖未及牡丹之艶色。而此花次之。因古一人爲小牡丹。花中之潔者也

朝なけに染る心もふかみ草うへしかひある花の色哉

○哥情評して云。此君は川むかひの花をながむる風情なり。わたし舟はない事か

○探花子が云。郡内の羽織に。茶綸子の裏付たる心地す。少し斗くすみて見ゆ

○堀　江

堀江花者男山女良花也。其花如蒸粟。遍昭愛レ名而落馬。有勿語人之ロ号。頼風妻之縁由歟。花中之娟者也。

をみなへし多かるのべに宿りせばあやなくあたの名をや立なん

○芝山評して云。此君は香の淺き。にほひ袋のごとし。しめやかならざる薫何ほどか殘多し。

○探花子が云。寂さきの干物か。少しうつとしくぞんずる

○難波新地　高津新地

二處之花共似宮城野萩。幾村盛有輿色。爲仲愛レ之都土産。固花中之軟者也。

人はこぬ草葉のとこのつゆの上にかたしくねたる萩か花つま

○花吟評して云。此君達は打つゞく五月雨の心地ならん。しつぽり過てさびしき風情あり

○探花子が云。平にも蒸にも味噌をつかひし。こつてり料理を喰がごとし

○街　子

街子花者如谷陰躑躅。樵者採花。袖人逐レ色。固花中之不レ藍者也。

つま木にはもれしつゝしも山陰に心と花のたくほかけかな

○探花子が云。いたづら後家の。ひぢりめんの内衣したるがごとし。ほのめかして見せとふもあり。又人にしられんもいかゞと。つゝましく思ふ所もある風情たらんか

○私料子

蓮女者似浮萍。漂池面。吟行澤邊。住レ水而任去住所。謂蓮華者也。

よるべなき身はうき草の根をたへてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ

○探花子評して云。夏の火燵といふべし。何とやらあつかましく見へます

○比丘尼

比丘尼者枯野之小花歟。緑花鬢空散而不見下草之餘残無春色者也。

霜をきて色なきのべのむら〳〵に見ゆるや殘るお花なるらん

○探花子評して云。頭は出家にて。姿は遊女。手足はむかでのごとくにて。なくなければ香までかくるゝ

○樂水評して云。此君はうぐろもちのごとし。日の光をおがむ事はなりませぬ

○及之が云。此君の中にも近年は。ひらひ子といふもの出來て。牛なしに自身二役せらるゝと也。夏の蚊といわんか。日ぐれからさは〳〵出て。餅つきに行るゝはさて

○探花子が云。竹田の木戸口のごとし。十文ゞゝじゃ。どなたでもござれ〳〵

○辻君

總嫁者暗夜落花也。色消姿亡失春氣。不足賞美者也。落花浪藉者斯之謂乎。

やみの夜のすがたあやなしちる花の色も

百花評林終